

ていせい

訂正

国語

三 問一 選択肢ウ

誤 ㄱのがどうか疑問が残るといふこと。
 ㄱのがどうか疑問が残るといふこと*
正 ㄱのかどうか疑問が残るといふこと。

21 浅野中学校

国語

(時間 五十分)

受験番号

【注意事項】

- 1、試験開始の合図があるまで、問題冊子の中を開いて見 はいけません。
- 2、指示があつたら、解答用紙を問題冊子から取り出し、解答用紙の決められた欄に配られたシールをはりなさい。はり終わつたら、解答用紙をすみやかに問題冊子の中に戻しなさい。
- 3、試験開始の後、受験番号を問題冊子・解答用紙の決められた欄に、氏名を解答用紙の決められた欄に、それぞれ記入しなさい。
- 4、問題文には、原文(原作)の一部を省略したり、文字づかいや送りがないを改めたところがあります。
- 5、答えは解答用紙の決められた箇所かしょに記入しなさい。
- 6、問題は十七ページあります。問題が抜けている場合、印刷がはっきりしない場合は申し出なさい。
- 7、何か用事ができたときは、だまって手をあげなさい。ただし問題の内容についての質問をしてはいけません。
- 8、試験終了の合図があつたら答えを書き続けてはいけません。すぐに筆記用具を置いて解答用紙の回収を待ちなさい。
- 9、問題冊子は持ち帰ってかまいません。

一

次の——線部①～⑧のカタカナを漢字で、⑨・⑩の漢字の読みをひらがなで書きなさい。いずれも一画一画をていねいに書くこと。

校長先生の^①コウワを聞き、中学生としての自覚を持った。

君の将来の^②テンボウを聞かせてください。

古くなった屋根を^③ホシユウする。

世界の平和を^④キキユウする。

ヘリコプターで農薬を^⑤サンブする。

友人は^⑥リコ整然と自らの主張を述べた。

しっかり勉強して、入学試験に^⑦ソナえる。

春から地元ききょうの企業に^⑧ツトめる。

^⑨定石どおりに計画を進める。

ここ一年のあなたの成長は、^⑩著しい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

だから、の三文字を、いつも若葉に言い聞かせる時のように、はっきり三つの音に区切って、父は電話にまくしたて始めた。

「だから、思い出すとつらいつて言うんなら、そういうことは忘れちまえばいいんだよ。はじめっからなかったことにするんだ。……え？ そりゃ、そうはいかないときだってあるけどさ、気の持ちようだよ。それくらい上手くやりなよ、いい年なんだから」

若葉は右手だけ使ってサンドイッチを食べながら、テラスの向こうのリビングで忙しく歩き回っている父の様子を盗み見た。電話の相手はたぶん祖母だろう。何か愚痴っているらしいのは雰囲気分かる。父があまり話を聞かずに、むやみに励まそうとするのもいつもどおりだ。

A されるのつて、一体どんな気持ちだろう。

ぼんやり考えるうちに、薄切りのトマトが零れ落ちそうになったのを、若葉はあわてて口で受けた。左手は動かさない。今はだめだ。

▼父の声は広いテラスを回り込んで、ダイニングの側まで筒抜けになっていた。この家に引っ越してからというもの、元から大きい声がさらに大きくなった気がする。やたらに広くて部屋数が多いから、声を張り上げなければ届かないのだ。初めのうちはそれが嬉しくて、みんなやたらに大声を出したものだ——と昔のことに気を取られたとたん、テーブルの下に隠したままの左手が、ふいにずっしり重たくなった気がした。

「若葉、左手どうしたの。高校生にもなってみっともない」

キッチンでしゃがみ込んだまま母が言った。もう仕用のスーツに着替えているのに、引き出しの中の鍋やフライパンを痴性な仕草で並べ替えている。若葉は頑として左手を動かさずに、なんでもないとほぐらかした。母がまなじりをつり上げて何か言いかける。と、狙いすましたように階段を駆け下りる足音が響いて、兄が姿を現した。どうやら寝坊したらしい。

「朝飯、なんでもいいや。すぐに食べるものない？」

自分でやって、と母はしゃがんだままトーストの袋を指さした。兄は一枚取り出すと、焼きもせずハムとバターをたっぷりのせ、半分に折って、立ったままでかぶりつく。

「母さん、何やってるの。服が汚れるよ」

パンをほおばりながら、兄がキッチンカウンターの向こう側を覗きこんだ。

「お掃除の人に入ってもらったら、引き出しの中がぐちゃぐちゃになっちゃったのよ。並びを変えられちゃ困るわ」

「気にしなきゃいいじゃないか。自分でやる時間なんかないんだから」

「こういって、人に触られるの嫌なのよ」

ふーん、と兄は気のない返事をした。引き出しの中を勝手に並べ替えられたら自分だっていやだな、と若葉はサンドイッチの切れ端を口の中に押し込みながら思う。自分の性格の厄介なところは全部この

人に似ているな、としみじみ感じて、淡い色のスーツを汚しても片付けをしたがる母が急に疎ましく思えてきた。

ねえ、困ったよねえ、と、左手にまとわりつく微妙な重みをあやすように揺らしながら、目には見えない気配に向かつて若葉は呼びかける。人に言えない気持ちを抱えてしまったときには、いつだってこうしてきたのだ。

リビングの話し声はいつのまにか収まっている。やっと電話を切り上げたか、と思ったら、待ち構えていたようにまた呼び出し音がなった。父の口調が、険しい感じに切りかわる。今度は仕事の電話なのだろう。と、話し声に押しつぶされるように、うわあおん！ とギョツとするほど大きな猫の声が響いた。

とたんに、若葉の左手にまとわりついていた気配が、ふっとかき消える。

半開きになっていたドアから、猫がするりと入ってきた。「よう、ルロイ」と兄が呼びかける。部分長毛の、身体の中でも大きな猫で、白黒の斑の毛並みがつやつや輝いている。緑色の目がはっとするほど澄んでいて、オスなのに表情がどこか愛らしい。若葉もこの子が大好きだ。なのに、顔を見るたび気が重くなる。

猫はキッチンカウンターの下に歩み寄ると、餌用の深皿を前足で揺すぶりながら、いつそう大きな声で鳴き出した。これまた良く通る声なので、猫のくせに父に似たのではないかと思うくらいだ。と、当の父がつかつかとやってきて

「おい、なにか食い物を持ってルロイを黙らせてくれよ。これじゃ電話にならん」

と、早口でささやきかけた。若葉はそつと左手を持ち上げて、感覚を確かめてみる。今はもう、何も感じない。どこか寂しい気持ちのまま立ち上がって、ステイック型のおやつを戸棚から取り出すと、封を切り、猫の目の前に差し出した。

「トト、食べな」

猫は途端に鳴きやんで、おやつにむしゃぶりついた。目を細めて一心に食べるその顔を、若葉はつい、別の誰かと比べてしまう。

猫が食べ終えるのを待って、自分の皿をキッチンへ持って行った。引き出しの片付けを終えたのか諦めたのか、母はもう辺りを片付けて手を洗っている。若葉が近づくと声を潜めて、
「ちゃんとルロイって呼ばなきゃ可哀相でしょう」
と、釘を刺した。

(中略)

でも若葉はどうしても、この子を「ルロイ」と呼ぶことが出来なかった。そっちの方がよっぽど可哀相じゃないか、と思えてならないのだ。

そう思った途端に、また左手にふわりと何かが巻き付くを感じた。若葉はそれを抱きかかえるように、肘から先に右の手を添えてやる。

空になったおやつを袋を名残惜しげにかじっていた猫が、ふっと顔を上げて、耳をそばだてた。やあって、玄関のチャイムが鳴る。迎えの車がやってきたらしい。父は電話を切り上げて、ソファの背にかけた上着に袖を通してながら、

注1 痴性：神経質で、ひどくきれいな性格。

「おい、誰か一緒に乗ってくか」

とダイニングに向かって声をはりあげた。

「私、自転車で行くから」

そっけなく答えて、若葉は洗面所へ向かった。背後で兄が、「あ、俺乗るわ」と答えるのが聞こえる。歯磨きの前に二人を見送ろうと、若葉は玄関で立ち止まった。もう大学の二年生だというのに、兄は未だにぎりぎりまで家を出ようとしめない。靴をかついで慌ただしく廊下をかけてきたと思うと、三和土に飛び降り、靴をつっかけながら振り向きざま、

「お前、あんまり母さん怒らせると蜂の巣にされるぞ。巻き添えはいやだからな」

ひょうひょうとそう言って、父のあとについていった。ドアが閉まる前の一瞬に手を振って、ふと、以前住んでいた家の玄関を思い出す。傷だらけの上がりかまちにポロポロの引き戸。見送る仕草は今も同じなのに、全然別の光景だ。▲

(中略)

少しのんびりし過ぎた、と若葉は慌てて自転車を出した。

住宅街をしばらく走ると、最近開通したばかりの広い街道に出る。ここを十分ばかり行けば、道路沿いに学校のグラウンドが見えてくるのだ。緩い上り坂の向こうに、目がくらみそうに大きな空が広がっている。道の両側にはまだ畑や緑地がここに残っていて、五月のこの時期にはまぶしいような緑が広がるのだ。

少し走ったところで、道路の端に、片足について止まっている自転車が見えた。振り向いて手を振る娘は、若葉と同じ制服を着ている。

「おはようー」

はつらつとした声が、朝の空気をふるわせた。安西千夏だ。

「ごめんね、待った？」

若葉が追いつくよりわずかに早いタイミングで、千夏もゆつくりとこぎ始めた。千夏とはいつもこの場所で落ち合う。今日みたいに千夏の方が待っていることもあれば、彼女が横合いの路地から出てくるのを若葉が待つこともある。若葉達の高校は遠方から電車で通う生徒がほとんどだから、自転車通学はあまり多くない。千夏は数少ない自転車仲間なのだ。

「今日、一限から小テストなの、古文の」

千夏がちらりと振り向いて言った。クラスも部活も違うから、共通の話題はあまりない。

「忘れてた。うちのクラスも今日だ」

何の準備もしていなかった。部活の練習にかまけて忘れていたのだ。

「私、古文って苦手だな……。あんなの憶えられないよ」

しおれたような若葉の声に、千夏は、

「私、得意なの」

と、きつぱり答えた。彼女は **B** をしない。得意なもののは得意だとハッキリ言う。なのにちつとも嫌な感じがしないのは、話し方の真つ直ぐな響きのせいだろうか。自分を大きく見せようとしなかりに、かばい立てすることもない。

千夏の活き活きとした黒い髪が、ポニーテールに結われて、若葉の目の端で揺れている。草の原を一直線に駆けていく五月の馬。千夏はそういう美しい生き物に似ていた。若葉はそのしつぽを追いかけながらずつと追いつけずにいるような、そんな気分になってくる。

「安西さん、古文好きなの？」

C みたいに、若葉は問いかける。うん、と千夏はまたしてもきつぱりうなずいた。

「古い色の名前がすごくきれいで、それで好きになったの」

「色の名前？」

「例えば、同じ青色でも、天色、紺碧、水浅葱……、微妙に違う色に、ちゃんと別の名前がついてるの」

はりのある澄んだ声が、なめらかに色の名前を読み上げていく。

「きれい」

「素敵な名前でしょう？」

横並びになった彼女が、誇らしげに微笑むのが見えた。誇っているのは自分のことではなくて、彼女自身も何かまばゆいものを見上げているのだと、なんとなく分かった。

「じゃあ、私何か指さしたら、安西さん、色の名前を答えられる？」

いいわよ、と、ちよつとしたゲームを始めるような調子で千夏は言った。とはいえ、辺りに見えるものと言えは空と雲と田畑、たまに珍しい色合いの家を見かけても、自転車ではすぐに行き過ぎてしま

う。若葉はちよつと迷って、あれは？ と、空の眩しくない辺り——少し西寄りの雲のきわを指さして

みた。

「あの辺は、縹色かな……？ ううん、薄藍色の方がいいかもしれない」

「じゃあ、その栗林の下にはえてる草は？」

「光の加減で今は黄色っぽいから、萌黄色かな」

「すごい、じゃあ、あの雲は？」

「卯の花……、白練……、ううん、ちよつと青みがかって見えるから、白花色がいいかもしれない」

その声は、まるで千夏が **D** みたいに響いた。何か大切なものに呼びかけるように、千夏は

次々に色に命を吹き込んでいくのだ。若葉だって空を見る、雲を見る。けれどもいままでこんなにたく

さんの色は感じなかった。目の前の世界が一気に鮮やかになったようだ。

「すごい！ なんてそんなに知ってるの？」

千夏はふふ、と笑って、

「名前をつけなくちゃ、その色を区別できないから」

と、とっておきのものを取り出してみせるような調子で言った。

「名前を呼ばないと、その色はないのと同じになっちゃうでしょう？ なんとなく違う気がするって

思っても、別々の色だつてはつきりと分からなくなってしまう。だから名前を覚えて、ちゃんと呼んで

注2 三和土、セメントや砂などで固めた、玄関などの土間。

注3 古文、江戸時代以前の文章、およびそれらを扱う国語の授業のこと。

あげるの。他の色と一緒にされたりしないように」

②はつと胸を衝かれた感じがした。

ペダルをこぐ足がいつのまにか止まり、千夏からどんどん遅れていく。いつしか手が勝手にブレーキレバーを握って、若葉は悄然と立ち止まってしまった。

「どうしたの？」

少し先の方で、千夏が振り向く。

「なんでもない、今行く！」

我に返って、若葉は立ちこぎになり弾みをつけた。

(中略)

正真正銘のルロイ——一匹目の猫がやってきたのは、今からもう七年も前、若葉が九つの時のことだ。

その頃、若葉達が暮らしていたのは、線路際に小さな家の建ち並ぶ下町だった。隣の家の友達と、窓を開けただけで話が出来た。電車が通ると会話は途切れ、まげじと大きな声を張り上げれば、どこかの窓が音を立てて閉ざされるような、無遠慮だけれども寛容さには乏しい、時に懐かしいけれども、あまり帰りたいとも思えない町。

ルロイを連れてきたのは父だった。いつだって若葉に何かを買ってやりたくても叶わず、その無念さを全部、もらってきた仔猫が背負っているみたいだった。母はおかんむりだったが、棄ててこいと言われて若葉が大泣きしたために、仔猫は命拾いすることになった。

(中略)

状況が一変したのは、若葉が六年生になった頃のことだ。父の商売が急に勢いづいて、それまで住んでいた家を出、もっと大きな家を借りることになった。音楽好きな父は若葉に楽器をやらせるのが夢だったので、防音室つきの今の家を紹介されるなり、その日のうちに決めてしまった。勿論、ルロイも一緒だ。ルロイはまだ若い猫だし、この家でずっと一緒に暮らせるだろうと、若葉は何の疑いもなく信じ込んでいた。

当然そうなるだろう、と思っていると、いきなり足をすくわれるものだと思い知らされたのは、去年のことだ。若葉が中学三年の五月、ちょうど一年前に、ルロイは六歳で死んでしまった。急な心臓の発作だったらしい。生きているものがこんなにあっけなくなくなるものなのかと、若葉はしばらくショックで涙も出ず、ようやく泣けるようになってからは、一ヶ月くらい、目が溶けそうなほど泣きに泣いた。

泣き止んだのは、哀しみが去ったからではなかった。驚かされて、泣いている場合ではなくなってしまうからだ。若葉をビックリさせることが大好きな父の思いつきで。

ある日、楽器の練習も出来ないまま、部屋にこもって泣いていたら、父がノックをして入ってきた。ひき結んだ唇が、今にも笑い出しそうに緩みかけている。何て顔だろう、と眉をひそめた若葉の目の前に、父は思わぬものを差し出して見せた。

仔猫だ。それもルロイとほとんど同じ毛並み、同じ柄の。

驚いて声も出ない若葉に、父は、すぐく探したんだぞ、と誇らしげな顔をして見せた。

——喜んでみたいにみえるだろうか？

若葉はひどく混乱した。二度と帰ってこないはずだった愛おしいものと、泣きに泣いて、必死でお別れしようとしていたのに。まだ、泣き終わってもいなかったのに。

「いいか、ルロイは死んでない。この通り、またお前の所に帰ってきた。哀しいことは何も起きなかったんだ。嫌なことは全部忘れて、今日からこいつと楽しく暮らせばいい」

(中略)

それっきり③涙は止まってしまった。考えることも、思うことも、あまりに多すぎて、頭も心も、ショートしてしまったような感じだ。

仔猫はもちろん可愛かった。父も母も兄も、特にこだわる様子もなく、新しい猫をルロイと呼び始めていた。だが若葉はどうしても、その名前を口にする事が出来ない。

迷いを晴らしたくて、部活に熱中するようになった。ある日、オーボエの管を羽根を使って掃除していたら、ふと、左手にまわりつく猫の気配を感じた。ルロイだ、とすぐに分かった。ルロイはこの羽根が本当に大好きで、仔猫の頃など、振り回してみせると疲れて倒れるまで遊んでいたからだ。

忘れないで、と言われたような気がした。それで若葉は、二匹目に別の名前をつけようと思いついたのだ。ルロイの弟だから、「おとうと」から二文字取って、トト、と名付けた。

それから、ルロイは時々現れるようになった。生きていた頃と同じように、若葉の左手に、ふわふわの暖かい前足を巻き付けてくるのだ。

(香月夕花「左手のルロイ」による)

問一 — 線部①「だから、の三文字を」とありますが、この表現がかかっている部分としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 言い聞かせる
- イ はっきり三つの音に
- ウ 区切って
- エ まくしたて始めた

問二 A B C D E に入れるのにもっとも適切な表現を、六字以上十字以内で本文から探し、抜き出して答えなさい。(句読点・記号も一字に数えます)。

問三 ▼ ▲ではさまれた部分の描写から読み取れる「兄」についての説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「兄」は陽気でいたずら好きな性格の持ち主で、悲観的なことばかり考えている他の家族に対して冗談ばかり言っているからかかっている。他の家族からはあきれられている。
- イ 「兄」は気持ちのこもっていない不愛想な受け答えばかりをして家族を見くだしているが、不思議なことに他の家族には好意的に受けとめられ、一定の関係性が保たれている。
- ウ 「兄」は他の家族の状況を落ち着いて見つめる心の余裕を持っており、「父」や「母」とも一定の距離を保ちつつ、自然体でコミュニケーションを取ることができる。
- エ 「兄」はいがみあう家族同士を結び付けることに心をくだき、「父」と「母」に対しては常に優しい言葉をかけ、反抗的な性格の「若葉」にもとても親身な姿勢で接している。

問四 ▼ ▲ではさまれた部分の描写から読み取れる「母」と「若葉」についての説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 左手に違和感を覚えている「若葉」は、「母」に自分の状態を伝えようと必死になっているが、「母」は何でも自分で判断しようとする自己中心的な性格で、強い言葉で一方的に相手の話をさえぎってしまうので、「若葉」の気持ちを理解できずにいる。
- イ 自分はきちんと身だしなみを整えていないのに、他人の生活態度は口うるさく注意する「母」の性格を、「若葉」は腹立たしく思っているが、「母」にさらに厳しく注意されることを恐れ、自分の気持ちを率直に伝えるのを控えておとなしくしている。
- ウ 「若葉」の左手のしぐさを不審に思った「母」は、「若葉」の本当の気持ちを探ろうと努力しているが、自分の世界に閉じこもって思わせぬに左手を隠し、本当の気持ちをはっきり示さない「若葉」に対して、不満といらだちを感じている。
- エ 周りから見るとちぐはぐなことをしているのに、自分の考え方をかたくなに変えない「母」の性格を、「若葉」は苦々しく思っているが、一方で「若葉」自身も同じような性格の持ち主であることを自覚しているので、「母」だけでなく自分自身にも嫌気がさしている。

問五 A B C D E に入れるのに適切な表現を考え、四字以内で答えなさい。(句読点・記号も一字に数えます)。

- ア 野生の馬の強さと美しさに嫉妬する
- イ 野生の馬からすこすこ後ずさる
- ウ 野生の馬を追って颯爽と走っていく
- エ 野生の馬におぞおぞと近づく

問六 A B C D E に入れるのにもっとも適切な言葉を、次のア～エの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア 色の名前を生み出していく
- イ 世の中の全ての色を知っている
- ウ 自在に色を使い分けている
- エ 無数の色で大空に絵を描いている

問七 — 線部②「はっと胸を衝かれた感じがした」とありますが、「若葉」はこの時、「千夏」の言葉からどのようなことに気づいたと考えられますか。二十五字以上三十五字以内でわかりやすく説明しなさい。(句読点・記号も一字に数えます)。

問八 — 線部③「涙は止まってしまった」とありますが、なぜですか。その理由としてもっとも適切な

なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「父」は「若葉」のためにルロイに似た仔猫を連れてきたのだが、「父」のあまりに楽しそうな様子からは本当に「若葉」のためを思っているとは感じられず、ただの自己満足のよう思われてしまい、素直に喜ばなかったから。

イ 死んでしまったルロイとの思い出から抜け出せずに苦しんでいた「若葉」にとって、ルロイの存在をすっかり打ち消してしまうような「父」の言動がまったく理解できず、ルロイの死を悲しめる状態ではなくなってしまったから。

ウ 「父」は「若葉」がルロイの死ときちんと向き合い、悲しみを受け止められるようになることを期待して、新しい仔猫を買ってきて元気づけようとしたのだが、そうした「父」の楽観的な発想にいらだちを覚えると同時に、考える気力を失ってしまったから。

エ ルロイの死と向き合って徹底的に悲しんだ後、「若葉」はルロイへの思いを断ち切ろうと考えていたのに、「父」がルロイに似た仔猫を連れてきたことで、かえってルロイのことを思い出し、深い悲しみに沈んで疲れ切ってしまったから。

問九 本文の内容と一致するものとしてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今の「若葉」の家族は、「父」の仕事が充実してきたことで経済的に恵まれた生活を送ることができている一方で、互いに自分の思いを素直に伝えあうことができず、それぞれの関係性にすれ違いが生じてしまっている。

イ ルロイが死んだ直後から、「若葉」はルロイが左手に巻き付けてくるかのような不思議な感覚を覚えるようになったが、新しい家に引っ越してからもその感覚は続き、「若葉」だけは死んでしまったルロイの思い出をずっと忘れ去ることができずにいる。

ウ 昔の「若葉」の家は雑然とした下町にあり、懐かしい思い出がたくさん詰まった場所であるが、今の「若葉」の家はのどかな田園風景の広がる街にあり、空や田畑にも鮮やかな色の美しさが感じられる素晴らしい環境で、「若葉」は昔の家よりも気に入っている。

エ 昔の「若葉」の家族は、狭いからこそ家族がにぎやかに会話を交わすことのできる家の中で、ささやかながら幸せな生活を送っており、「若葉」はまさかルロイが死んでしまうとは予想もせず、ルロイと一緒にずっと幸せな生活を送れるものだと思っていた。

三 次の「文章1」・「文章2」を読んで、後の問いに答えなさい。

〔文章1〕

私たちの多くは、たえず前に進むことを強いられている。そして哲学は、私たちを立ち止まらせようとする。

たとえばひとは野菜を作ったり、書類を書いたり、パワーショベルを操作したり、商品売ったりする。そのとき、どうすれば渋滞を避けて時間通りに取引先の会社に着けるかは考えても、「なぜひとは働くのか」とは問わない。どうすれば売れ行きを伸ばすことができるかは考えても、「働くとはどういうことなのか」と考えこんだりはしないだろう。そんなことを考えていては、約束の時間に間に合わなくなるし、売れるものも売れなくなってしまう。仕事が順調にいつている人ほど、そういう「余計なこと」は考えないにちがいない。

だが、哲学の問いは問う者を立ち止まらせる。「働くとは何か」と考えて、ほかにこれといって何も働こうとしない。それは、「前に進め」という圧力に縛られた者の目からは、ちょうど蟻の行列に目を奪われてその場を動けなくなってしまう子どものような姿にも見えるだろう。哲学の問いは、「前に進め」という声から自由な者だけに許されている。だから、子どもにしか哲学はできない。

しかし、同時に、子どもには哲学はできない。「なぜ働くのだろう」と問い続けているだけでは哲学とは言えない。そもそも、たんに「なぜ働くのだろう」と口にするだけでは、まだ問いにさえ到達していない。それはたぶん、何かため息のようなものにすぎない。

哲学の問いは、^②明確な答えをもつような問いではないばかりか、問いの意味さえ、定かではない。問いの答えが何であるかと、そもそも自分が問うている問いの意味は何かを、同時に手探りしていかなければならない。哲学の問いを問うにも、独特の技術と力を必要とする。それは子どもにはまだ難しいにちがいない。

さらに、哲学はいわば「A」でなければならぬ。働いたことがない人には労働のなんたるかはとらえられないが、しかし働くことに没入している人もまた、労働を客観的に見ることができない。働くことと働かないことのどちらか一方だけに身を沈め、そこから出ていくことのできない者には、「働く」ということそのものを対象化することはできないのである。哲学は、私たちの営みを、その実践に参加している者の視点からだけでなく、その実践の外にいる者の視点からもとらえるよう、要求してくる。自分がいまとっている視点にこだわるのではなく、自由にさまざまな視点からものごとをとらえなくてはならない。そして、子どもはそんなフットワークを身につけてはいない。だから、子どもには哲学はできない。

子どもにしか哲学はできない。しかし、子どもには哲学はできない。この逆説の中に、哲学者たちはいる。彼らは、大人でもない、子どもでもない。

哲学者なのだ。

(野矢茂樹編『子どもの難問』による)

〔文章2〕

東京都北区、王子の町で育ったので、子供の頃は王子製紙の工場から立ちのぼる白い煙をいつも眺めて過ごしていた。

王子製紙は明治時代からつく製紙会社の老舗。当時の製紙工場から排出されていた煙には独特のにおいがあり、さほど刺激的ではないのだが、鼻の奥まで届き、^① B 的ダメージよりも C 的ダメージのほうが大きく、はっきり言えばおならにそっくりなおいだった。いまは臭気を抑える技術を取り入れられているようだけど、あの頃は違い、風向きによって僕たちの校庭に煙のにおいが届くと、「こいただろ」「お前がこいただろ」と、そばにいた相手とお決まりのやりとりをしていたものだ。

あの日、体育の時間、先生がポートボールか何かの説明をしているのを聞き流しながら、僕は煙突の煙を眺めていた。眺めながら、働く大人のことを思った。あの製紙工場の煙の下では、たくさんの大人が働いている。あんなにおいの中心で働くのはさぞ大変に違いない。——そんなことを思いながら、自分もいつか大人になって働くのだなあと、たぶん生まれて初めて意識した。

子供時代は、働いている大人を見ることがほとんどなかった。共働きだった両親が家にいるのは働いていないときだし、^③ 先生は「先生」だし、八百屋さんも魚屋さんもスーパーの店員さんも、「そういう人」という認識しかなかった。申し訳ないけれど、働いているという発想自体がなかったのだ。なのに製紙工場の煙を見て「働く大人」を思い、自分の将来のことまで想像したのはどうしてか。

きっと、その場所で働いている人の姿を、一度もこの目で見たことがなかったからだろう。目の前で働いている大人たちは、働いているように見えないのに、会ったこともない人たちに関しては働いている姿を想像できるというのは、奇妙なものだ。

僕を含めて世の中には小説が大好きという人が多いけれど、実はここに秘密があると思っている。小説というのは考えてみれば、絶対に会わない人たちの話を読んでいくわけで、だからこそ、その人たちの考えていることや、見ている景色や、一人きりであるときの横顔まで、リアルに想像できる。

インタビューなどで「小説家になったきっかけは何ですか？」と訊かれることがよくある。いつもアレコレ頭をひねりながら言葉を返すのだが、じつのところ腹の中では「きっかけくらいで小説家になったら世話ないよ」なんて考えている。でも、ひょっとしたら、小学校時代に見たあの製紙工場の煙は、きっかけの一つだったのかもしれない。見えない人たちの想像して心動かされるというのは、小説とそっくりだ。

当時は小説なんて読んだこともなかったけれど、いまこうして思い返してみると、小説を読んでいるときに見える景色と、あの煙を眺めながら胸の中に浮かんだ景色は、リアルさの質が、よく似ている気がする。だとしたら、^④ ああ煙には感謝しなければならぬ。

と、ここまで書いたところで、ふと思いついて王子製紙のことを調べてみた。

すると驚いたことに、王子製紙は王子に工場を持っていなかった。いや、昔はあったのだが、会社が分裂した際、十條製紙がその工場を引き継いだらしい。

注1 王子製紙・十條製紙・製紙会社の名前。

注2 老舗・昔から代々続いている店舗や企業。

D

「僕たちが眺めていたあの煙は、いったい何だったのだろうか。あのにおいは、はたして何のにおいだっただろう。僕が生まれて初めて思い描いた「働く大人」は、いったいどの誰だったのか。僕はいたい誰に、何に、きつかけをもらったのか。」

インターネットのおかげで調べ物が楽になり、大抵の疑問はすぐに解決できるようになった。この疑問だってきつと、答えを知ろうと思えば簡単にできるのだから。でも、^⑤ここは敢えて調べないことにして、せっかく手に入った魅力的な謎を、しばらくこねくりまわしてみようと決めた。コンピュータの操作方法を覚えることが「使いこなす」ことだと思っていた時期が僕にもあったが、「使いこなす」というのはたぶん、こういうことなのだろう。最近ようやくわかるようになった。

それにしても、時間というのは本当に過ぎ去るらしい。小学校時代に謎の煙をかきながら、初めて思い描いた「働く人」に、いつのまにか自分もなっている。人生の大先輩たちに比べたら、まだ経験は浅いけれど、気づけば二十年近く——小説家として働きはじめてからを数えても、十一年。

自分の書いた「見えない人たち」も、誰かに何かのきつかけを与えてくれているだろうか。そんなことがあってくれたら嬉しい。彼らは本物の人間と違って歳をとらないし、全国に出張もしてくれるけれど、誰かがページをひらいてくれないかぎり、絶対に出会うことができない。あの頃、否応なしに僕たちの目に入り、鼻に飛び込んできた謎の煙と、自分の小説と、どちらがたたくさんの人にきつかけを与えているだろう。

(道尾秀介「煙の謎」による)

問一——線部①「子どもにしか哲学はできない」とありますが、なぜですか。その理由としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 目の前に興味深い現象が現れた時に、時間をかけてその状況を観察することに熱中できるような好奇心は、子どもにしかないから。

イ 仕事に専念して成果をあげなければならないという強迫観念に捉われずに済む楽観的な発想は、子どもにしかないから。

ウ すでに仕事に従事している大人とは違い、将来の職業選択の前に仕事の多様性について考える必要性は、子どもにしかないから。

エ 日々の仕事をこなすことだけに専念せずに、ものごとの根源的な疑問に立ち返って考えられる状況は、子どもにしかないから。

問二——線部②「明確な答えをもつような問いではないばかりか、問いの意味さえ、定かではない」とありますが、どういうことですか。その説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 哲学の設定する課題はいずれも簡単に解決できるものではないのに加え、そもそも課題の内容をあらわす言葉そのものがとても難解な表現になってしまう傾向があるということ。

イ 哲学においては設定した課題に対する答えを導き出すことがとても難しいのに加え、課題を設定することそのものについても考え続けなければならないということ。

ウ 哲学は設定される課題が一般的にとっても難解であり、答えに辿り着くまでに時間がかかるので、そのような課題を設定すること自体に意味があるのかがどうか疑問が残るということ。

エ 哲学では答えを導くことが絶対に不可能な課題が設定されるので、そのような課題に取り組むことにどれほどの有益性があるのか分からなくなることが多いということ。

問三

ア 穏やか イ 細やか ウ 軽やか エ 鮮やか

問四

ア B 物理 C 心理

イ B 具体 C 抽象

ウ B 形式 C 実体

エ B 精神 C 身体

問四

つ選び、記号で答えなさい。

問五 — 線部③「先生は『先生』だし」とありますが、どういうことですか。その説明としてみっと

も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 筆者にとって、「先生」は社会的に必要な存在だという認識があったので、日常生活の中でその存在意義について改めて考える必要がなかったということ。

イ 筆者にとって、家族のような近い距離にいるわけではない「先生」に対して、仕事内容について日常的に親しく質問することは難しかったということ。

ウ 筆者にとって、「先生」は子どもと同じ発想でものごとを考えると印象が強かったので、自立した大人の職業として理解することは難しかったということ。

エ 筆者にとって、「先生」は当たり前のように日常生活の中にある存在であり、数多くある職業の一つに従事している大人として認識していなかったということ。

問六 — 線部④「あの煙には感謝しなければならぬ」とありますが、なぜですか。〔文章2〕をふまえてその理由を考え、次の説明文の□にあう形で、十字以上十五字以内で答えなさい（句読点・記号も一字に数えます）。

製紙工場の煙を見た筆者の経験が、
□から。

問七 — D は、次のア～エの五つの文から構成されています。五つの文を正しい順番に並べか

え、その順番を、解答用紙の形式に合わせて記号で答えなさい。

ア 十條製紙が引き継いだというその工場は、なんと僕が生まれる二年も前に閉鎖されていた。

イ 親や近所のおじさんおばさんがそう言っているのを、鵜呑みにしていたのだろう。

ウ いつも友達と「王子製紙の工場がさあ」と言い合っていたのは、どうも僕たち共通の勘違いだったようだ。

エ つまり、煙突から煙なんて出ているはずがなかったのだ。

オ 何だ、あれは十條製紙の工場だったのかと、この原稿を冒頭から書き改めようとして、また驚いた。

問八 — 線部⑤「ここは敢えて調べないことにして、せっかく手に入った魅力的な謎を、しばらくこねくりまわしてみよう」と決めた」とありますが、筆者はどうしてこのように考えたのですか。〔文章2〕をふまえてその理由を考え、二十字以上三十字以内で答えなさい（句読点・記号も一字に数えます）。

問九 「働く」ということに関して、〔文章1〕・〔文章2〕からそれぞれ読み取れる内容をまとめた文として、もっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「文章1」では、子どもでも大人でもない「哲学者」になることで「働く」ということを対象化できると指摘している。一方、「文章2」では、子どもの頃に思い描く「働く」ことのイメージは、実際には誤った認識であることが多く、リアリティに欠けると述べている。

イ 「文章1」では、仕事が順調な大人ほど「働くとは何か」という問いかけを軽視しがちであると指摘している。一方、「文章2」では、大人になって実際に仕事に従事する経験を持つことで、「働くとは何か」という問いかけに答えることができるようになる」と述べている。

ウ 「文章1」では、実際に仕事に従事した経験のない子どもにとって「働く」ということを対象化して理解することは難しいと指摘している。一方、「文章2」では、「働く」ことのイメージを形成する際に、子どもの頃の原体験が様々な作用をもたらす可能性について述べている。

エ 「文章1」では、「働く」ことに対する子どもと大人のイメージを、完全に一致させることは難しいと指摘している。一方、「文章2」では、大人になった後で取り組んだ仕事を通じて、多くの子どもにも「働く」ことの楽しさを伝えられる可能性について述べている。

(以下余白)

国語解答用紙

受験番号

氏名

※注意 解答欄は設問の順序通りにはなっていないところがありますので、まちがえないこと。

↓ここにシールをはってください↓

一

⑨	⑤	①
⑩	⑥	②
しい	⑦	③
	える	④
	⑧	④
	める	

二

問一	問二
問三	問四
問五	問六
	C
	D

問二

6

10

三

問一	問二
問三	問四
問五	問六
問七	問八
問九	問十

問七

25

35

20

問七

↓

↓

↓

↓

問六

10

15

問八

30

20

□

□

□

□

□

□

□

□